

戦士

第13号

「戦士」編集委員会

「即位の礼・大嘗祭」反対闘争の高揚の示すもの

89年の「大葬の礼」反対闘争を上回る規模で、昨秋「即位の礼・大嘗祭」反対闘争が全国各地で取り組まれた。11月12日「即位の礼」当日には、約5万人もの労働者大衆が反対行動に立ち上がったといわれている。ここにおける運動の特徴・意義をどのようにつかんでいくのか、12月2日「天皇来京・京都茶会反対！天皇いらん！関西集会」における小田原紀雄氏（「天皇代替りに関する情報センター」）の発言をとりあげながら、以下提起していきたい。

I

小田原氏の発言の中で、注目しておきたい部分は、概ね次のようなものであった。

* 全般的に「即位の礼・大嘗祭」反対の運動への取り組みは遅れ気味に見えたが、結果的には予想を上回る大衆的な高揚となった。

* この大衆的な高揚を生み出したのは、かつての上からの指令による中央闘争への動員ではなく、全国各地での集会・行動への自主的な取り組みであった。

* 地方の小規模な集会において、「天皇制はいらない」

「天皇のいない社会で暮らしたい」といったストレー
トな政治表現が多く提出された。

* 市民運動は後退してしまっているという認識があるが、

構想力から脱していないものとなっている。このことは、小田原氏の発言の中に、中央闘争にたいして地域での取り組み自体に特別の意義づけを与えようとする傾向が見受けられたこととも無関係ではないであろう

III

新しい運動の特徴の意義・積極的な質をどこに見い出していくのか、この点がしっかりと押さえられていく必要がある。それは、こうした運動を担っている諸グループ・諸個人が、自主的な判断・自己のスタイル・自己決定に基づいて運動を進めていくこととしており、ブルジョア政策への反対というところで自己の位置を取っていくとするのではなく、自己を取り巻く生活環境をはじめ、社会的諸関係そのものの変革を模索しはじめていることである。

ここでは、例えば「天皇制反対」↓「天皇制強化反対」↓「服喪・祝賀強要反対」へとスローガンを切り縮めていくことで、大衆性を獲得していくとする政治技術主義、一種の「困い込み政治」は意味をもたない。

また、かつての諸党派への大衆運動体の系列化を基盤としたところでの全国的な運動の統一（全国政治闘争）が後退し、地域・生活諸領域での多様な運動の展開という形態が前面に出ていることも了解しうることである。このことは、社会的諸関係の変革を目指していくことす

それは旧来の「著名人」を立てての動員式の「市民運動」が後退しているにすぎず、新しい市民運動の展開が生まれて来ていると思う。

大衆集会で発言する「文化人」の多くが、あれこれの天皇制解釈にふけっている中であって、この集会での小田原氏の発言は、今日の運動状況をとらえ、今後の運動の方向を探っていくとする位置を有したものであると評価しうる。しかもこの間の運動の特徴を端的に押さえ、提起しているといえる。

II

では、新しいスタイルでの大衆的な諸運動の登場とどのように結びつき、運動の発展を促進していくのか。この点をめぐっての、小田原氏の次のような発言については、古い大衆運動観をひきずったままのものにとどまっていると言わざるをえない。

* 新しい市民運動の高揚を持続させていくためには、闘争課題を提起していかなければならない。

* 自衛隊海外派兵問題ではもっと大衆は集まりやすいであろう。

少なくともこうした発言に関しては、大衆運動に対する旧来の視点にまだまだとらわれており、古い型の発想に狭い

る作業が、いまだ個々の模索にとどまっており、これらの個々の模索・実践・経験を、共通の普遍的な経験として総括していくイニシヤティブが登場していないことを意味しているに他ならないのである。

もとめられているのは、上からの統制・枠づけによる形式的な「運動の統一」ではなく、自立した諸運動・諸運動体の、各々の経験に裏打ちされた自主的な判断にもとづくものとしての——すなわち諸運動・諸運動体の内的な必然性に依拠したものとしての——運動の統一を創り出していくことである。プロ独一般を立場とし、ブルジョア国家の破壊に狭く収斂されていく旧来の政治運動の枠組を転換させ、人々の社会的結合の今日的在り方（商品生産・資本の運動に規定され、ますます国際的な広がり形成しているそれ）を問い直し、作り換えていくとする諸個人・諸グループの様々な試みと結びつき、これを全面的に発展させていく新しい政治運動を登場させていかねばならない。徹底した民主主義としてのプロ独は、こうした運動を、真に大衆的な規模において、すなわち千万・億単位の大衆の事業として展開していくための政治的条件を整えていくものとして実現されねばならないのである。

かかる自覚と意識性に立っていくことで、「即位の礼・大嘗祭」反対運動をブルジョア政策反対のスケジュール闘争に終わらせることなく、この闘いの意義と成果を今後へ継承し発展させていくようにしなければならない。

